

マイケル・クログスガード・インタビュー

マイケル・クログスガードは1953年にデンマークのコペンハーゲンで誕生し、現在もここに在住。1960年代半ばにボブ・ディランの音楽に興味を持ち、ザ・テレグラフ誌の編集長だった故ジョン・ボールディーとは1970年に友達になった。クログスガードによるテープ庫の調査結果は、まずザ・テレグラフ誌に掲載され（ボールディーは「本誌が行なった最重要プロジェクトだ」と語っていた）、ボールディーの不慮の死によりザ・テレグラフ誌が廃刊となったため、ザ・ブリッジが掲載を引き継いで現在に至っている。

クログスガードはディランのレコーディングとコンサートの歴史をまとめた3冊の本をこれまでに著しているが、この努力がオフィシャル筋から認められ、1995年には、ディランのレコーディング・セッションの記録ファイルの閲覧許可を与えられた。現在、彼は整形外科医としてコペンハーゲン大学に勤務するかたわら、新著『Bob Dylan's Columbia Studio Recordings』の執筆作業に取り組んでいる。

ザ・ブリッジ誌はクログスガードに2007年3月にインタビューした。

●マイケル、まずはコペンハーゲンでのあなたの少年時代や若い頃について、それから、家族や学歴等についてお聞かせ願えますか。

私は代々医者の家系出身なのです。祖父は一般開業医で、父は心臓の専門医でした。いところにも医者をやってる者がふたりいます。私の長女も医学を勉強しているところですよ。奇妙な偶然なのですが、私はゲオルグ・ジェンセンの銀細工工場の隣で誕生し、その30年後に彼の孫娘と結婚しました。私は9歳の時まで両親と妹と一緒にコペンハーゲンの中心部に住んでいました。その後、郊外（コペンハーゲンの中心地から8km離れたリングビー）に引っ越し、ティーンの頃はそこで過ごしました。私の人となりや夢の多くは、ここに由来します。ここは中流家庭の暮らす地域で、1960年代には非常に現代的なスピリットにあふれていました。大規模なポリテクニク・スクールがあり、優れた音楽シーンもありました。面白い思想がたくさん登場したのもこの頃です。私は親友と一緒にアマチュアの天文学サークルを作りました。宇宙にとっても興味があり（今でもです）、多くの時間はこのサークルに費やしていました。オフセット印刷機を購入して、アマチュアの天文学雑誌を印刷していたほどです。学生時代は、この印刷機で生活費を稼いでいました。

私の学歴は極めてストレートです。高校卒業後に医大に進学しました。1974年前後には、勉強を一時中断して、レコード会社（Hookfarm）を始め、この会

社にたくさんの時間を費やしましたが、デンマーク人がロック・ミュージックの世界でブレイクする見込みはないと感じました。たくさんの新人アーティストを世に紹介し、一部の人は現在でも音楽シーンで活発に活躍していますが、医学の勉強が終了した時に（1980年）、このレコード会社もたたみ、医者の仕事に集中しました。私の専門は整形外科でした。実家を離れてからは、ずっとコペンハーゲンの真ん中に住んでいます。私はこの場所を気に入っています。妻（現在は胃腸専門の外科医）とは1980年に出会って1983年に結婚し、その3週間後には長女が誕生しました。5年後には次女も生まれました。

●ディランの音楽に最初に興味を持ったのは1965年とうかがっていますが、あなたが最初に聞いてハマったディランの曲は何ですか？ いつどこで聞いたか覚えてありますか？ あなたが最初に入れ込んだのは「フォーク」のディランだったのですか、「エレクトリック」のディランだったのですか？

デンマークでは1964年からディランのアコースティック・レパートリーが知られていて、ギターを弾くことの出来る人なら誰もが演奏していました。学校の音楽の授業で、教師が「Masters Of War」や「Blowin' In The Wind」等を歌っていたほどです。ディランの新曲が紹介されるのはアメリカより少し遅れてはいましたが、『Highway 61 Revisited』がリリースされる以前から、多くの人がディランについてよく知っていました。1965年に私に「Like A Rolling Stone」に興味を持たせようとした先生がいましたよ。クラスメートのひとりが『Blonde On Blonde』を買った時には、下手な買い物だと思いました。2枚組なのに14曲しか入ってないからです。ビートルズだったら、アルバム1枚に14曲入っているでしょ。私がエレクトリックのディランに興味を持ったのは、1966年後半か1967年前半のことだと思います。私が本当にディランに夢中になったのは『John Wesley Harding』からです（あまりエレクトリックなアルバムではありませんが…）。午後になると音楽室でこのアルバムを何度も聞きました。同時に、ブートレグも登場し始めました。1961年の《ミネソタ・ホテル・テープ》は初期のブートレグのバックボーン的な音源ですが、ここでディランは強力なパフォーマンスを行なっていて、こうしたアコースティックの曲から大きな感銘を受けました。《ウィットマーク・デモ》や《ベースメント・テープス》の多くの曲についても同様です。ブートレグが、私がディランの音源的側面に興味を持った真の理由です。

●ザ・ブリッジ No.26（2006年冬号）のジョン・ポールディー10周年特集で、あなたは「ボブ・ディランの音源を熱心に集めるようになったのは、1970年に

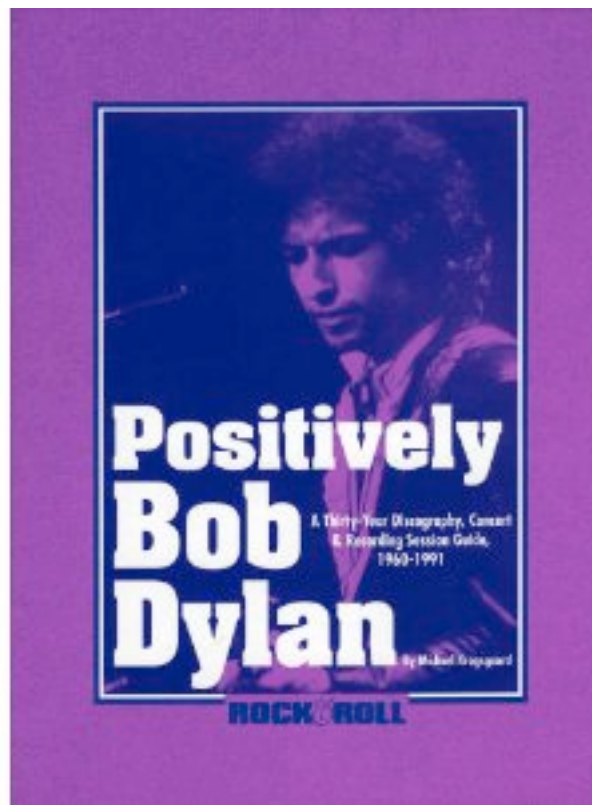
ジョン・ボールディーに紹介されてからです」とおっしゃっていましたが、ディランのどんな未発表マテリアルをあなたはジョンから提供されたのですか？この頃のジョンの援助と励ましがあったからこそ、後になって素晴らしい作業を行なうことが出来たと思っていますか？

《スタッズ・ターケル・ワックス・ミュージアム》は私の大好きなテープです。ジョンはまたブートレッグ化されていない良質な《ベースメント・テープ》《リーズ・デモ》《ウィットマーク・デモ》《1961年ミネソタ・パーティー・テープ》も持っていました。ライブ音源では《1965年フォーレスト・ヒルズ》もありました。ジョンはそうしたテープの供給元であり、彼からは大いに触発されました。ジョンはどんなことでもアカデミックに議論することが出来て、常識に流されることはありませんでした。自分ではあまり言っていませんでしたが、ジョンは私の扉を開いてくれた人物です。記事や作業をジョンから認められると、いつも気分が良かったです。試験みたいなものでした。だから、ジョンがいなかったら、こんなに深くディランの研究はしなかったでしょう。ディランの音源研究に関する刺激は別の方面からも受けました。コー・ランカスターというオランダのディラン・コレクターからです。私は彼には会ったことはないのですが、友人を通じて彼がタイプライターで打ったディランのディスコグラフィと、3時間に及ぶ未発表レコーディング（とても音質の良い《1962年フィニャン・クラブ》など）を手に入れました。彼はとても厳密でアカデミックでした。

●あなたがディランのコンサートを見た歴史について教えてください。最初に見たディランのコンサートはいつですか？1966年にザ・ホークスと行なった扇動的なツアーは見る事が出来ましたか？ディランのコンサートを見るために、どのくらい地球上を飛び回りましたか？それから、ネヴァー・エンディング・ツアーで見たあなたのベスト・コンサートは？

1966年にはコンサートを見に行くことが出来る年齢ではありませんでした。私が見た最初のコンサートは1968年のクリームです。初て見に行ったディランのコンサートは、1978年6月26日ドルトムント公演で、あのヨーロッパ・ツアーではそれ以降のショーは全部見に行きました。1991年までのヨーロッパ公演は約半数は見ています。1992年にはオーストラリアに行ってショーを見ましたが、それ以来、ディランを見るためにスカンディナヴィアの外まで行ったことはありません。ショーが面白く感じなくなったからではありません。単に時間が無いのです。これまでに見たベスト・ショーは、すぐに頭に思い浮かぶものと、1990年6月29日ロスキレです。G・E・スミスとのやりとりは私の琴線に触れま

した。昨年（2006年）にもロスキレに来ましたが、ガラガラ声でシャウトする歌い方は1990年のショウからはかけ離れたものでした。しかし、とても面白く、元気の良い演奏でしたよ。



『Positively Bob Dylan: A Thirty-Year Discography, Concert and Recording Session Guide, 1960-1991』

●1981年に出版された最初の本『Twenty Years Of Recording - The Bob Dylan Reference Book』では、この本の目的は「音の記録を系統的に並べることである」と言ってました。600ページ以上に渡る本なので、大変な労作だったに違いありません。計画段階では、この本はどのくらいの長さになる予定だったのですか？ インターネット以前の時代においては、大量のセッションやライブのデータを集めるのに、特にどんな点で苦労しましたか？

私はアイデアにいったんハマってしまうと、それを成し遂げるのに必要な時間や手間をあまり考えられなくなってしまいます。当時大切だったことは、コレクター友達の優れたネットワークです。ディランが1978年に日本でプレイした時には、スティーヴン・ピカリングが現地に知り合いがいて、ショウに関する情報

を直に得ることが出来た唯一の人物だったのです。ただし、私がスティーヴンと知り合いだったのではなく、ヨーロッパ圏の私の友人が彼と交渉してくれたのです。このような大切な理由もあって、私はディラン以外の多くのアーティストも収集しています。テープの中にはディランにあまり興味のない人物が持っていたりするものもあるので、交換用のネタとして幅広いコレクションを持っていることが重要なのです。しかも、コレクションを維持するにはたくさんの手間隙がかかります。1978年にはヨーロッパに住んでいる友人のうち、アメリカ公演を見に行ったのはたったひとりでしたが、現在ではライブ・パフォーマンスに関する情報は----音源も----インターネット上にあるので、こうしたものを得るのに、個人的なネットワークを持っている必要はありません。しかし、セッション・テープや他の音の記録（インタビューやテレビ/ラジオ、公式ではないパフォーマンス等）に関する詳細については、まだまだ基本的なリサーチ活動が必要です。これだけははっきり言えますが、多くの友人の助けがなかったら、私はいかなる本もまとめあげることが出来なかったでしょう。基本情報の多くはコレクター諸によって調査され、ザ・テレグラフやザ・ブリッジ、他のファンジンに掲載されていたものですから。

●ザ・テレグラフの52号（1995年夏）で、あなたはこう明かしています：「私がかねてより、ディランのレコーディングに関する事実に基づくデータの調査を行なう許可を申請していましたが、今年の1月に良い返事をもらいました。手紙には『考慮を重ねた結果、私共の持っているレコーディング記録とコロムビア・レコードにあるファイルを、貴殿になら調査していただいて差し支えなしと判断する。』と書いてありました。」学校の校長先生から届いたような許可の知らせの他に、ニューヨークにあるソニー・レコードのテープ庫を調査したいという動機は何だったのですか？ ディランの事務所をどのように説得して、アーカイヴへのアクセス許可を得たのですか？ ディランのスタッフからあなたのリクエストにOKが出た時、あなたは驚きましたか？

ディスコグラフィを作る作業をする際、最も良い情報はテープと、保管されているさまざまなセッション・データです。『Twenty Years Of Recording』を出版した後に、私はディランの事務所に、スタジオ・レコーディングに関するデータをもらえないかと打診してみました。何度かやりとりをしたものの、未発表マテリアルに関する情報はあげませんと言われたので、既発表マテリアルに関する情報だけでももらえたら幸いですという返事を出しました。でも、それは不可能です。発売したマテリアルと未発表のマテリアルを区別することなんて出来ないのですから。それが実情です。私は『Master Of The Tracks』『Positively

Bob Dylan』に対してディランの事務所から良い反応を得ていたので、何年もかけて、新エディション用に情報をもらいたいという要望を出し続けましたが、良い返事はもらえませんでした。1994年12月に休暇でアメリカに行き、ニューヨークで2日ほど過ごしました。それで、私は再度手紙を書き、そちらに出向くことが可能だということ、真面目だということ、そして、新エディションのアカデミックなアプローチについて説明しました。返事がなかったのも、向こうが私の手紙にウンザリしているのではないかと考えていました。しかし、デンマークに戻って1カ月後に突然、あなたがおっしゃってた内容の手紙が届いたのです。しかし、個人的な理由から、その1月は人生であまり幸せな時ではありませんでした。封を開けた時、長い間もらおうと大変努力してきた良い返事を遂にもらえたというのに、中身がよく飲み込めなかったのを、はっきりと覚えています。体調が良くなってからやっと返事を書くことが出来、最初にニューヨークに行ったのは1995年5月でした。5月の晴れた日にニューヨークで飛行機から降り立って、長年の夢だった体験に向かって一歩踏み出したのは、素晴らしいことでした。

テープがソニー・アーカイヴズに保管されているとかいう知識は、事前に持ち合わせていたわけではありません。実際に、そこにはないテープもたくさんありました。何度か訪れて気づいたのですが、私がもらっていたのは実質的な効力のある許可だったのです。ソニー・アーカイヴから必要な助けを得ることが出来るだけでなく、ディランの事務所からも、例えば、ミュージシャンと交わした契約等の情報をもたらえたのです。ソニーでの作業が終わってから、私はディランの事務所によってニューヨーク・エリアに保管されている音の記録についても調査を続けました。そうした情報へのアクセスを許してくれたことだけでなく、それを100%開示してくれた----私の観点からですが----ことに関して、私はディランの事務所に深く感謝しています。彼等は最初の約束をしっかりと守ってくれたのです。

私がアクセスを許された理由は、真面目に研究調査を続けていて、何年にも渡ってオフィシャル筋を通してお願いしてきたからです。それが大切だったのだと思います。それに加えて、ソニーが大変な仕事を抱えていたということもあるでしょう。コロムビアから購入した40万巻のテープ、10万枚のラッカー盤の入った箱を整理するという作業をしていたのです。その殆どには何のラベルも貼られていませんでした。アーカイヴの責任者とスタッフはとても一生懸命に作業をしていました。ディラン関係のものの中には、私が中身を解明したものもあるでしょう。



[クログスガード氏の研究成果が掲載されたザ・テレグラフ誌]

●あなたの学究的本能もさることながら、NYCにあるレコーディング・ファイル
を閲覧出来るなんて、ディラン・ファンの究極の夢です。お菓子屋さんに連れて
行かれて、何でも買っていいよと言われた子供のようなものでしょう。ソニーの
ディランの聖域に入って最初に発見したものは何ですか？ 具体的に言うと、あな
たには何をしたいという権限があったのですか？

あなたのおっしゃる通り、駄菓子屋に連れて行かれた子供状態です。先にもお
話したように、私はしばらく後になるまで、内容をしっかり理解することの出
来る気分ではなかったのです。ソニーに到着した際に、私はマーク・カークビー
とマット・ケリーに紹介されました。このふたりがアーカイヴの重要人物です。
彼等からさまざまな情報システムがどう機能しているか説明されました。私は手
書きで記入されているスタジオの日誌に目を通し、ディランの名前が書かれてい
るセッションを特定しました。それから、中央コンピューターでこれらの作業番
号をサーチしました。テープがスタジオの日付と結びついている時もあれば、そ
うでない時もありました。その後、ディランのテープの多くはいくぶんランダ
ムに載っており、概して、スタジオの作業番号からはテープを探せないことに気づ
きました。それで、結局、そこに保管されている2,000ものディランのテープそ
のものを調査することになりました。しかも、何が収録されているのかは、前も
って分かっていない状態でした。コンピューターに入っていた情報から、私は調
べたいテープのリストを作り（テープの殆どには箱の中に曲目等が書いているメ
モが入っていました）、ソニーがウッドストックにある保管場所から私のために、

それを取り寄せてくれました。テープが届くのを待っている間、私はCOナンバーのカード（1つのCOナンバーにつき1枚のカードが存在していました。基本的には、全ての曲に番号が与えられ、全部で約9万の番号がありました）やマトリクス・カード（1つのマトリクス番号につき1枚のカードがありました）、その他の情報を調べました。

●コペンハーゲンとニューヨークを何度も往復して----自腹だったのですか?----さぞかしお金がかかったでしょう。ソニー・アーカイヴには何回出向いたのですか？ 現地でのリサーチにはどのくらいの時間がかかったのですか？ アクセスに関しては白紙委任状を渡されたのですか？ マテリアルの中には触ってはいけないものもあったのですか？ ジェフ・ローゼンやソニーのスタッフは好意的でしたか？

渡航の費用は全部自分持ちでしたが、親戚の家に泊めてもらったので、そんなに問題ではありませんでした。それぞれ2週間ずつ、10回ほどアメリカに行きました。私の知る限りにおいて、私は東海岸で保管されているあらゆるものに対してアクセスを許されていました。しかし、『Eat The Document』のマテリアルにはダメでした。当時はニュージャージーで保管されていて、私がそこに行く機会があった時には、何か別のことに使われていたのです。残りのマテリアルの保管場所は西海岸なのだと思います。そのマテリアルも調査する許可をもらえるかどうかは、あまり話題にしたことはないのですが、保管場所は多数あり、すぐには手に入らないと言われました。もし、そっちのマテリアルも調べる機会があったら、とても面白いプロジェクトになるでしょう。是非私が担当したいです。先にも述べた通り、スタッフは皆、とても協力的でした。思っていたよりも丁寧に扱ってもらえました。

●ディランと会った、もしくは接近遭遇したことはありますか？

1978年にイエーテボリのスカンディナヴィウムの外で会いました。たくさん写真を撮り、チケットにサインをもらいました。それから、1981年にはオスロからコペンハーゲンに向かうフェリーの中で会いました。やさしいことに、『Twenty Years Of Recording』に「best wishes」って書いてくれましたよ。1984年には、イタリアのシルミオーネで行なわれた記者会見ではボブの真ん前に座るという貴重な機会に恵まれました。デンマークのコンサート・プロモーターを通じて、記者会見場に入ることが出来たのです。ヴェロナからタクシーに乗って、シルミオーネ郊外にある高級ホテルに行きました。ベルを鳴らすとフェンスが開き、丘の上まで坂道を15分も歩いて、やっと入り口にたどり着きました。

私は記者会見が行なわれる予定の部屋を見つけました。長いテーブルがひとつとマイクが3本あり、私が右の位置を確保した30分後に、ジャーナリストをいっぱい乗せたバスが到着しました。彼等は全員不機嫌でした。というのも、カメラやレコーダーは持ち込み禁止と言われたからです。私はこの件については知らなかったので、2台のレコーダーを回しました。偶然、ディランは私の真ん前にある右のマイクを選びました。この記者会見は茶番で、質問は全てイタリア語に訳されなければなりませんでした。英語でされた場合にもです。回答もまた同様でしたから、質疑にとっても時間がかかりました。私はカメラも2台持参していたので、とても良いショットをたくさん撮ることが出来ました。サインももらいました。最後にディランと会ったのは、2005年のロスキレ・フェスティヴァルのバックステージです。私はボブの楽屋の前のテーブルのところに座っていました。ドアのほうに背を向けて座っていた時に、強いカルマを感じたと思ったら、ディランが私の隣に立っていたのです。残念ながら、ディランに挨拶をする度胸はなかったのですが…。

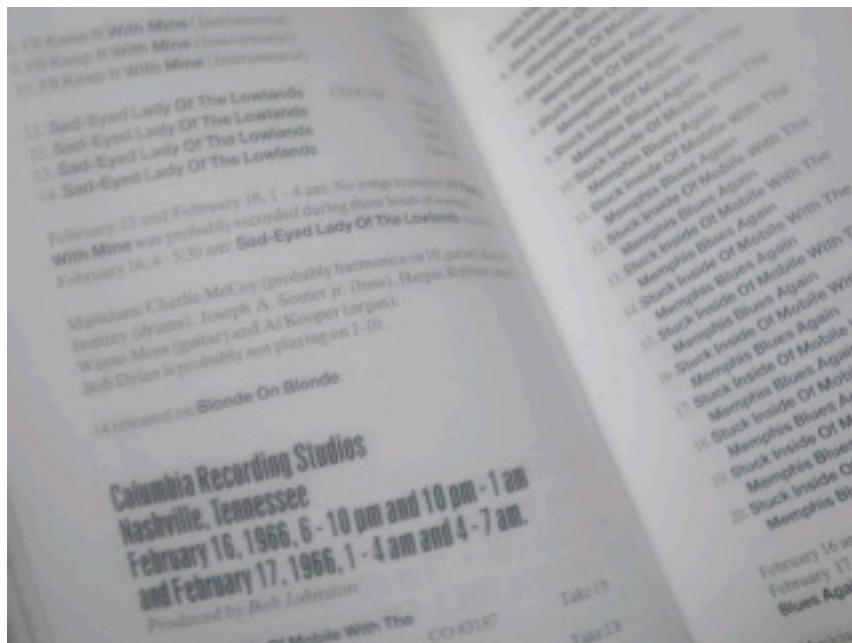
●1967年1月から1970年12月までをカバーしているニューヨークとナッシュヴィルのコロムビアのレコーディング日誌は、結局見つからないままなのですか？日誌が見つからないことで、調査上で問題が生じましたか？

私が現地にいる間は日誌は出てきませんでした。1970年のセッションに関しては混乱があります。例えば、あるセッションのミュージシャンの契約書があるのですが、存在するテープの中身のどれとも合致しないのです。データの照合はだいたい出来たと思うのですが、事実に達するためには、他の情報源をもっと徹底的に調査して、その結果と付き合わせなければいけません。これらのセッションの問題の一部は、アル・クーパーがオーバーダブのためにオリジナル・テープを持ち出していることです。このプロセスにはディランは関与していません。よって、セッションの中にはディランが参加していないものもあります。

●マイケルさん、保管庫にある未発表テープの全て、もしくは一部を聞くことは出来たのですか？例えば、1966年2月15～16日にテネシー州ナッシュヴィルのコロムビア・レコーディング・スタジオで、ディランは「Sad-Eyed Lady Of The Lowlands」を4バージョン録音したことが、あなたの調査で判明しました。こうしたファン垂涎のテープは聞くことが出来たのですか？

セッションに関して疑わしい点がある場合には、テープを最初から最後まで聞く機会がありました。例えば、『Freewheelin'』用に用意されたもののボツにな

ってしまったオリジナルのライナーノーツには、「Don't Think Twice, It's Alright」のエレクトリック（バンド）・バージョンについて書いてあるのですが、それは本当に存在するのだろうか、という疑問がありました。録音されたテイクが1つだけあるだが、4トラックのテープに録音され、バンドは恐らく最終ミックスの際に外されたのだろう、なんて書いてあるのです。だから、テープを聞いてみる必要がありました（結局、そんなバンドはありませんでした）。箱に何も書かれていないテープもありました。そのような疑問点がある場合にはテープを聞きましたが、もちろん、これは非常に特別な機会でした。「Sad-Eyed Lady Of The Lowlands」は、3つのフル・バージョンと1つの不完全バージョンが録音されています。



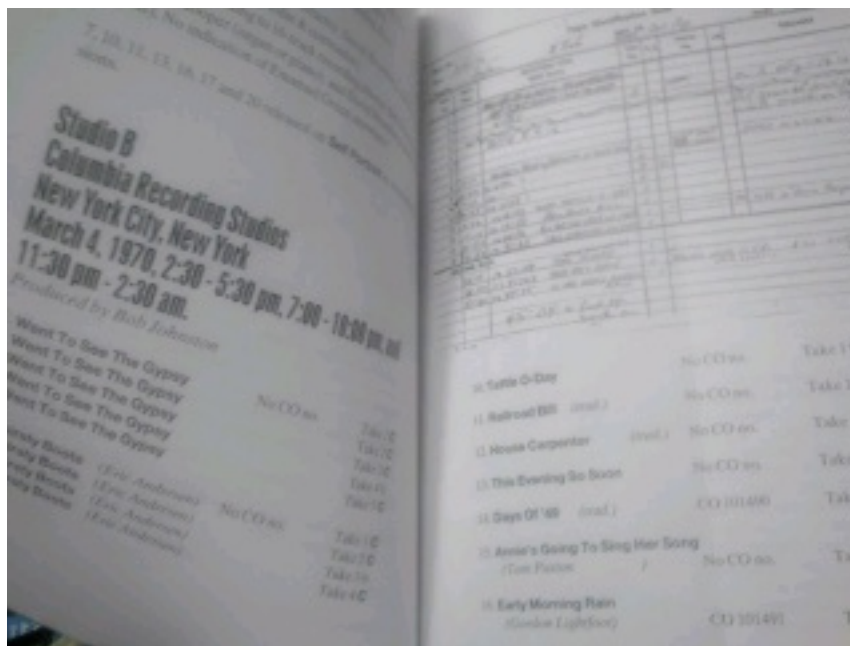
● 『John Wesley Harding』がディランの芸術的ピークだと主張している人もいます。ディランは1967年10～11月にナッシュビルで「Drifter's Escape」「I Dreamed I Saw St. Augustine」「All Along The Watchtower」「As I Went Out One Morning」等には、たくさんのテイクが存在するのですか？もしそうなら、どのような印象をお持ちですか？

殆どの曲に複数のテイクがあります。例えば、「John Wesley Harding」は2回レコーディングされているのですが、1番目のテイクではテープをスタートさせるのが遅すぎて、最初の2小節あまりが失われてしまっています。「All Along The Watchtower」は同じバージョンが2回レコーディングされています。エンディングがまずかったので、そこだけ別にレコーディングして継ぎ足しています。

「As I Went Out One Morning」や「I Dreamed I Saw St. Augustine」「I Pity The Poor Immigrant」といった曲には何バージョンもあります。以上の3曲のセッションは、2~3テイク録音してみて、まだやる気があったら、違うアレンジメントも試してみよう、というディランの普段の作業のやり方に極めて則ったものです。

●古い順に話を進めると、1970年3月にニューヨークのコロムビア・レコーディング・スタジオで行われた『Self Portrait』のセッションでは、たくさんの未発表トラックがあって、「Dock Of The Bay」「House Carpenter」「Universal Soldier」「These Hands」「When A Fellow's Out Of A Job」「Thirsty Boots」「Annie's Going To Sing Her Song」等はコレクターの間でも出回っていません。この頃のセッションについて覚えていることはありますか？

とても面白いです。一連のセッションはディランとデヴィッド・ブロンバーグが、今あなたが挙げた曲や、アルバムに収録された曲を試しに演奏することから始まって、それぞれの曲を1~数テイク演奏していますが、完奏していない曲もあります。「Universal Soldier」は最後の数ラインが入ってなくて、斬新でもっとユニヴァーサルなフィーリングのトラックになっています。「Days Of '49」のように、基本的にはディランとブロンバーグだけで演奏し、後でアル・クーパーがベースとドラムとエレクトリック・ギター等をオーバーダブしたものもあります。セッションが進むにつれて、関与するミュージシャンもどんどん増えていって、最終的にはフルバンドにバックグラウンド・ヴォーカルまでプラスされるという状態になり、クーパーはそれにさらにストリングスや他のオーケストラの楽器を加えたのです。面白いことに、『New Morning』用に最初に録音した曲が「Went To See The Gypsy」で、ディランはこの曲のいろんなバージョンを試しています。



●エルヴィス・ファンとして是非うかがいたいことがあります。ディランが恐らくウォーミング・アップ用に録音したのだと思いますが、あなたの記事中で「I Forgot To Remember」と載っているものは、スタン・ケスラー＝チャーリー・フェザーズの古い曲で、エルヴィスが1955年7月11日のサン・セッションで録音した「I Forgot To Remember To Forget」ではありませんか？ この曲や、1970年6月の『New Morning』セッションでレコーディングされた珍曲について何かお聞かせください。

この曲はウォーミング・アップ用などではないと思います。他の曲と同じように録音されていますから。真面目に取り組んだものですよ。このセッションの時、ディランは明らかに風邪をひいていて、そのおかげでこの曲はなかなかチャーミングなものになっているのです。とても奇妙なアレンジが施されている曲も複数あります。例えば、オリジナル・バージョンの「If Not For You」では、あまりバックアップがなく、バイオリンとフルートをフィーチャーした裸のディランがそこにいます。これはアル・クーパーのアレンジなのですが、うまくいきませんでした。「If Dogs Run Free」や「Time Passes Slowly」には違うバージョンがあります。その他の点では、1970年6月のセッションはとてもダイナミックなものだったという性格づけをしても差し支えないと思います。ディランのヴォーカルは心に触れるソフトなものというより、パンチが効いていて、前面に出ていて、アップテンポです。曲の中には演奏が長時間続くものもあります。「What It's All About」やインストゥルメンタルの「Ahoouah (Owau)」など、スタジオでの即興演奏もいくつかありました。アルバム『Dylan』のオリジナル・バージョンは、

実際に原盤が作られる段階に至っており、これには「Runnin'」「Alligator Man」（前者は1969年のセッション、後者は1970年のセッションでレコーディングされたもの）という面白いトラックが収録されていました。

●1971年3月16～19日に、ディランはニューヨーク・シティーのブルー・ロック・スタジオでリオン・ラッセルとチームを組んで「When I Paint My Masterpiece」をレコーディングしました。いろんなテイクを聞くことが出来たのですか？ 歌詞の違いなどはありましたか？

ディランのソロ、ギターがプラスされたもの、フル・バンドのテイクがあります。歌詞の違いには気づきませんでした。

●数カ月後（1971年9月24日）にニューヨークのコロムビア・スタジオBで、あなたの好きなセッションのひとつが行なわれており、そこではディランは昔のフォーク時代の友人、ハッピー・トラウムと再会しています。「You Ain't Going Nowhere」「I Shall Be Released」「Down In The Flood」「Only A Hobo」の快活なバージョンを生み出したこのセッションは、どのような感じだったのでしょうか？

このセッションもいつものディランのセッションと同じで、ひとつの曲を始めて、いくつかのバージョンを試してみて、使えそうなバージョンが収録出来たら、次の曲に移るといふ具合に進んでいます。私の知る限りでは、ベストなバージョンがアルバムに収録されています。特に、「I Shall Be Released」のブルージーなバージョンは素晴らしいと思いました。それよりも前に演奏されたこの曲の試演バージョンは、ベースメント・テープのバージョンと同じ方向性のような感じでした。

●1971年11月4日の「George Jackson」セッションは急遽行なわれたもののようにですが、他のセッションとの違いはありますか？

基本的にはありません。ディランは、用意していた「George Jackson」と「Wallflower」の2曲のいろんなバージョンを試しています。まずは「Wallflower」の素晴らしいソロ・バージョンから始まって、この2曲のいろんなアレンジを試しています。

●『Blood On The Tracks』は最初のバージョンと2番目のバージョンのどちら

がいいかという論争は、ディランがこの名盤を録音してから30数年経った今もなお続いています。1974年9月にニューヨークにあるコロムビアのA&Rスタジオで行なわれた最初のセッションと、ミネソタ州ミネアポリスのサウンド80スタジオで行なわれたセッションの両方を、聞くことは出来たのですか？ あなたはどちら派ですか？

サウンド80で録音されたテープを保管しているのはソニーではありません。恐らく西海岸で保管されているのだと思います。9月のオリジナル・セッションに関しては、演奏に深い悲しさがあるというのが私の印象です。理解は出来ますが、アルバム全部を聞き通すとなると、ぎりぎり耐えられるかどうかというところでしょう。これらの悲しいバージョンも表現の点では非常に美しいのですが、個人的な意見としては、一部の曲を再レコーディングして、もっとずっと元気の良いダイナミックなバージョンにしたのは正しい選択だったと思います。歌詞は基本的には悲痛で重苦しいままですが、再レコーディングしたおかげで、演奏の点ではさまざまな気分が絶妙な具合でミックスされたアルバムになりました。それに、最初のセッションのバンドにディランはあまり満足していなかったのだと思います。12月のセッションでのミネソタのバンドは、はるかにうまくディランとプレイしていると思います。

●1990年代前半にデヴィッド・ブロンバーグをプロデューサーに迎えてセッションが行なわれたという噂がありますが、本当に行なわれたことを示す証拠はありましたか？

テープはありませんでしたが、ミュージシャンの契約書によると、そのセッションはシカゴのアクミ・レコーディングで行なわれています。日付に関しては混乱していて、1通の契約書は1991年6月10～12日のレコーディング（6曲）に関するもので、3通の契約書（そのうち2通は同一のもの）には6月3～5日、6月13～15日（10曲）について書かれています。契約書には、その内容に触れている手紙が添えられているのですが、奇妙なことに1990年7月7日付なのです。いずれにせよ、セッションが行なわれたのは6月前半だったようです。「Miss The Mississippi」「World Of Fools」「I'll Rise Again」「Summer Wages」「Nobody's Fault」「Everybody's Cryin'」「Duncan And Brady」「Young Wesley」「Polly Vaughn」「Mornin' Blues」「Casey Jones」「Lady From Baltimore」「Tennessee Blues」「Kaatskill Serenade」といった曲が載っています。

●ライブ・マテリアルについてはどのくらい聞きましたか？例えば、ディランのスタッフが1978年のツアーの多くをレコーディングしていることは分かっています。不完全な状態でしか出回っていない初期のコンサートについてはいかがですか？例えば、1963年4月のニューヨーク、タウン・ホールや、1964年5月のロンドン、ロイヤル・フェスティヴァル・ホール等を、完全版は聞くことが出来ましたか？

ロイヤル・フェスティヴァル・ホールのテープは、私がソニーのテープ庫にいる時に出てきました。面白いことに、これはディランの要請でレコーディングされているのです。費用もディランのギャラから差し引かれています。テープの箱に曲目は書いてありませんでしたし、箱の中に何のシートも入っていませんでした。テープを最初から最後まで聞かなければなりませんでした。ファイルに載っている2つのカーネギー・ホール公演（1963年と64年）と同じく、ディランはとてもよくしゃべり、おかしな話をしています。1964年のフェスティヴァル・ホール公演のテープでは、フォーク・ミュージックに関する長くて複雑でおかしな話をしています。1978年のテープは東海岸では保管されていません。1969年以降のライブを収録したテープの殆どは、ソニーのテープ庫にもニューヨークのディランのオフィスにもありません。

●大量に存在するディランの未発表マテリアルをたくさん聞いて楽しんだと思いますが、これはリリースすべきだと声を大にして叫びたいものは何でしょう？

「Desolation Row」のピアノ・バージョンです。美しいのですが、完奏していません。歌とハーモニカにおいて、非常に隙のないフィーリングのこもった演奏をしています。スタジオでの「Just Like A Woman」のメイキング・シーンは、CD1枚に丸々収録する価値があるでしょう。早いテンポのルンバの、びっくりするようなバージョンがあるのです。「Pledging My Time」の早いテンポのバージョンもとても良いですね。ジェフ・ローゼンも既に大作業を行なっています。彼は『Bootleg Series』やその他のプロジェクト用にたくさんの優れた未発表テイクの在り処を突きとめました。私が聞くことが出来たのは、録音された数千巻のテープのうちのごく一部でしかないのですが、それでも、いつかリリースしたほうがいい面白いレコーディングがたくさんありました。

●ディランのオフィスやコロムビアのテープ庫と最後に連絡を取ったのはいつですか？その時にはどんな内容のことを話したのですか？

ソニーの調査を終了したのが約5年前なのですが、数年前にニューヨークでたまたまソニー・アーカイヴズのスタッフに会いました。テープに関する日常業務に役立ててもらえればよいなと思って、私の調査の完全な報告書をディランのオフィスとソニー・アーカイヴに送ったのが約5年前のことです。こまごまとしたことは、時々、ディランのオフィスとは連絡を取り続けていますが、ここ数年は、密な連絡は取っていませんし、次の本をまとめるのに真剣に取り組む時間ありません。

●グレン・ダンドラスやクリントン・ヘイリンといったディラン研究家も、研究分野があなたとかぶっています。彼等の作業は役に立ちましたか、それとも障害でしたか？

今、名前の挙がったふたりの大家の研究方法はかなり異なっています。グレンは非常に系統的かつアカデミックで、私の調査のやり方に近いです。彼の著書はもちろんよく読みましたよ。とても優れたものですが、たいていの場合、彼も私も同じ情報源を使っているの、私の側で未登録だった新しいデータを加えるのに彼の本を利用したことはありません。グレンはデータを並べるのに私とは違う方法を用いています。私は、もっと良いものを見つけた時には、すぐに考えを変える傾向があります。その点で、彼の本はインスピレーションになりました。クリントンはもっとずっと器用で刺激的で、私は彼の文の書き方が好きなのですが、彼の本には非常に個人的見解が含まれ、基本的な事実と彼の出した結論が一致していないことも少なからずあります。私が彼の本を利用するとしたら、調査を終えた後に私が到達した事実や結論以外の可能性に対しても、自分の考えを広げるためです。私は彼のロジックを理解した上で、どちらの見方が正しいか、自分自身と議論してみました。クリントンの挑発的な態度は私の作業とは極めて対照的で、一部の人に対してはこうした内容のものを受け入れ易くしたと思います。

●『Bob Dylan's Columbia Studio Recordings』という本があなたの最新プロジェクトだそうですね。これについて少しお聞かせください。

私がこのテーマを選んだのは、ディランのコロムビア・スタジオでのレコーディング活動に関する情報を扱うことについてなら未解決の問題はないので、完全版のレコーディング目録を作ることが出来ると思ったからです。この本はディランのキャリアの中の非常に興味深い時期を網羅することも出来るし、キャリアを鳥瞰することも可能です。まだ完成していませんが、書くべきことは分かっているので、今年の夏には終わるでしょう。

●最後の質問なのですが、ディランの作品に対する熱意は、ファンになって40年以上の間に衰えてしまいましたか？ 『Time Out Of Mind』 『Love And Theft』 『Modern Times』 に代表される後期ディランはどう評価していますか？

過去には、常に動向を追いかけているのに必要な時間が取れない時期もありました。きっと、今後もそんな時があるでしょう。そういう時以外は、興味は衰えていません。あなたがおっしゃった最新の3作は、他のどのアルバムよりも強力です。ディランは今でも最前線にいて、現代人にたくさんの影響を与えていると思います。個人的な意見なのですが、ディランに関して大切なのは、曲の中で実際の生活や人生体験を綴っているということです。私達は、彼の人生の浮き沈みをたどることが出来るわけです。ディランはとても正直です。彼のレコードが決してつまらなくなるのには、そういう理由があるのです。